

## もの言う牧師のエッセー 第277話

## 「だんじり」

昨年の暮れ、ユネスコの無形文化遺産に「山・鉾・屋台行事」が登録されることになった。神霊の依り代で、曳山、車楽、山笠などとも呼ばれる山車を引き回す行事が対象で、すでに登録されていた祇園祭などと併せて全国18府県33件の祭りの一括登録である。私が育った大阪は堺から岸和田にかけての泉州と呼ばれる地域では、だんじり祭りに対する人々の意気込みは相当なものだ。日頃から寄り合いを繰り返して準備をし（と言っても酒を飲んでいるだけなのだが）、祭り当日には、祝日でも仕事を休まないような人でさえ休んで祭りに参加する。

とは言え、神社の祭礼で用いられるだんじりではあるが、実はだんじりの曳行そのものは神道の儀式ではない。無病息災や豊作を祈願するのはあくまで神社を司る氏子であり、かつては宮や城に関わりの深い貴族らがそれに加わったが、後に庶民らにも参加が許可された頃から人々の楽しみの一環として現代の形へと発展して来たと言われ、神霊を移しての神事として氏子に担がれる神輿（みこし）とは大きく異なるのだ。実はこれにソックリな描写が聖書にある。

**「彼らは、神の箱を、新しい車に載せて、丘の上にあるアビナダブの家から運び出した。**

**アビナダブの子、ウザとアフヨが新しい車を御していた。丘の上にあるアビナダブの家からそれを神の箱とともに運び出したとき、アフヨは箱の前を歩いていた。ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、立琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った。」**

**第二サムエル記6章3-5節、**

とある。しかも前述のウザと言う人はこの直後、死亡している。“氏子”であるレビ人でもないのに神の箱に触れたからである。さらに言えば、箱は神輿のように担がれるものであって車に載せるものではなかった。この後ダビデは聖書のマニュアルに従って“だんじりから神輿”へとコンバートし、神の箱は無事に“奉納”されたが、その間“祭り”は大いに盛り上がり、ダビデは裸になって踊り狂い、人々には酒や料理が振る舞われた。

ここにゴスペルの究極の姿がある。誰でもミスを犯すし、羽目を外しドジすることもある。しかし、神を敬する者を、神は豊かに祝福して下さる。彼に日頃の守りを感謝し、これからの全てを委ね従って行く。そうする時、神はドンチャン騒ぎをも喜ばれる。

2017-3-10

